シリーズ 被災地の声

被災地の声を記録する

第一回

シリーズ「被災地の声」では、「被災地の声を記録する」「被災地の声を聴くということ」「被災地の声と念仏者」という三つのテーマで、震災と宗門のあり方について考えていきます。第一回は、「被災地の声を記録する」というテーマで、浄土真宗本願寺派総合研究所が行ってきた活動について報告いたします。

情報と物語

浄土真宗本願寺派総合研究所では、仙台別院に設置された東北教区災害ボランティアセンターを拠点として、被災者の声を「聴く」活動（居室訪問活動）を進めてきました。現在も、五万戸の仮設住宅が存在し、岩手・宮城・福島三県でおよそ二十五万人の方がたがそこで生活されています。「居室訪問活動」では、その仮設住宅に住む人びとの声を「聴く」という活動を、総合研究所の金澤豊研究員、安部智海研究助手の二人が、約二年にわたり行ってきました。その活動から見えてきたことがらをまとめたのが、拙著『ボランティア僧侶』です。

二人は、活動当初より、「あべ通信」という名称のニューズレターで、当地での活動内容を研究所宛に報告してきました。そこに記録されている被災地での出来事は、さまざまなメディアを通じて伝わってくる情報とは異なっていると感じられました。そのことが、『ボランティア僧侶』を執筆するきっかけともなりました。

異なっているように感じられた点は、簡潔に言えば、「情報」と「語り」の違いです。シリーズの第二回目で、「聴く」ということについて詳しく報告させていただく予定ですが、二人は、誰かに何かを伝えるために、「聴く」という活動を行っているわけではありません。被災地で過酷な状況に置かれている人びとの、聞こえてこない声を聴き、気持ちを大切に受け取ろうとするのが、二人の活動です。被災地で起こった「事実」を確認するために、仮設住宅の扉をノックしているわけではありませんから、そこで語られることがらも、メディアの報道とは自（おの）ずと異なったものになっています。あくまでも、被災地の人びとの個人的な思いが中心にあり、そこで語られ、受けとめられている言葉とは、情報ではなく、心

が染みついた「語り」となっているのです。『ボランティア僧侶』では、次のように書きました。

本書では、情報ではなく、「語り」を伝えたいと考えている。客観的な事実や情報ではなく、被災地の人びとが語った、「願いのこもった言葉」を、伝えていきたい。本書は、二人の僧侶が行った「聴く」活動の記録であるが、被災地の人びとの思いを文字にして刻印し、多くの人びとのところへ届けたいというのが、本書を執筆する目的である。

（四ページ）

語りの力

岩手県宮古市重茂半島の姉吉地区には、石碑が建っています。そこには、次の言葉が彫られています。

高き住居は児孫の和楽
想へ惨禍の大津波
此処より下に家を建てるな

宮古は、明治・昭和の二度の大津波によって甚大な被害をこうむりました。多数の死者も出ました。その教訓から、小さな集落の入口に、この石碑が建てられたのです。この言葉に刻まれた「想へ惨禍の大津波」という言葉には、先人の悲痛な思いが感じられます。思いが感じられる「語り」であるからこそ、風化することなく、八十年後の人びとにも受け継がれ、地区の人びとの命を護ったのです。このことは、「語り」の力を、私たちに伝えてくれているように思います。

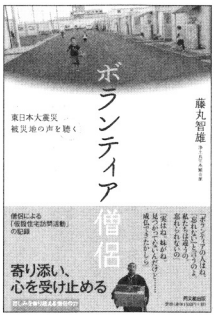
自然災害と宗教

思えば、親鸞聖人の生きた時代も、災害や飢饉が人びとを苦しめた時代でありました。親鸞聖人のお手紙には、「何よりも、去年から今年にかけて、老若男女を問わず多くの人びとが亡くなったことは、本当に悲しいことです」と始まるものがあります。この去年から今年というのは、西暦でいえば一二五九年から一二六〇年にかけてのことであり、『吾妻鏡』には、多くの人びとが亡くなったことが記されています。

こうした事態において、宗教者や宗教は、何を考え、何をなすことができるのだろうかということについて、お聖教の言葉もひもときながら、シリーズの第三回では震災について考えていきたいと思っています。

（藤丸智雄）

『ボランティア僧侶』



浄土真宗本願寺派総合研究所の二人の研究員の活動の記録が、一冊の本にまとめられました。本書では、被災地で、二人の僧侶に投げかけられた「ボランティアの人はね、『忘れない』と言うのよ。私たちは違うの。忘れられないの」「実はね。妹がね。見つかっていないんだけど……成仏できたかしら」「どうして、私が生き残ったのだろう」といった言葉が集められています。被災地の言葉にならない声を聴いていただくための書物となっています。（『ボランティア僧侶』は、同文館出版より発売されています）